

2023年5月の総評：木下龍也

## Summer の筆記体は簡単

きみの気がすむまで

波を書き足せばいい／汐見りら

「Summer の筆記体」が「波」に見える、というアイデアがこの歌の起点だったのかもしれない。それだけでも1首として成立させられそうだが、汐見さんはその先へ進んでみせた。付加されているのは「簡単」だから「気がすむまで」「書き足せばいい」という「きみ」へのメッセージだ。こうすることで、アイデアが宛名を持った。遠くから見るものではなく、読者ひとりひとりの手元に届くものとなった。現実の夏は必ず終わる。けれど、テキストであれば、言葉であれば、夏をいつまでも続けることができる。どうしようもない現実を、どうとでもなる言葉で変えようとする。そんな若くて爽やかな「波」が「きみ」に当たり、読者には飛沫として当たる。この歌を読めただけでも、選考委員をお引き受けしてよかったなと思う。

皮膚の内側の方がタトゥーだらけ

十六のとき吐いた嘘とか／浅葱

ばれるにせよ、ばれないにせよ、「吐いた」自分にはそれが「嘘」だとわかっている。だから「皮膚の内側」に刻まれる。「十六」歳という多感な時期に自身が「吐いた嘘」なら、なおさらそうなるだろう。傷、ではなく「タトゥー」として捉えたのが見事だと思う。外側であれ、内側であれ、傷は他者によって付けられることもある。けれど「タトゥー」は自身の選択によって初めて刻めるものだ。

「嘘」を吐いた理由を、環境や他者のせいにもできるはずなのに、自身の選択である、と背負っているようにも読めて、主体の潔さというか責任感の強さが垣間見えてくる。そして、傷にはないが「タトゥー」にはデザインがある。「皮膚の」外側の「タトゥー」と違って、光が当たることもなく、誰かが目にもすることもなく、手術をして消すこともできないが、二度と同じものは刻めない、自分にだけ見えるあの「嘘」を、現在は美しいものとして昇華できているのかもしれない。

誇大広告でなくアンパンマンの

絆創膏は無傷にも効く／貴田雄介

「2歳2ヶ月。痛く無くても貼りたくて痛いと言います。普通の絆創膏では納得してくれません。要注意です！」という Amazon のカスタマーレビューを読んでもよくわかる。実際に「無傷にも効く」らしい。純粹に傷口の保護や治癒を早めることが目的であれば、通常の「絆創膏」でいい。そこに「アンパンマン」が印刷されている必要はない。目的の遂行において「アンパンマン」は余計なのだ。けれども「アンパンマンの絆創膏」があるのは、その方がうれしいからだし、かわいいからだし、たのしいからだ。余計が物を特別する。そう考えてみれば「絆創膏」だけで

なく、車も服も家具も、世の中は余計であふれていて、我々は子どもの頃からずっと、そんな余計が大好きなのだ。

## 水が何者か分からんけれどただ 流れに沿って浮かんでた夏／杉本太

回想をしているので、主体は現在「水が何者か」を理解しているということだろう。あの頃は知らなかった、思えばあれは「水」だった、と。例えば、流水プールの写真に2歳くらいの自分が写っているとしたら、その自分は「水が何者か分からん」状態かもしれない。冷たいが、親もいるし大丈夫か、などと思いながら、浮き輪に乗せられていたのかもしれない。知っていても知らなくても「水」の性質は変わらないので「流れに沿って浮かんで」いることはできた。そんな頃に思いを馳せている歌なのかもしれない。この短歌を読んで初めて、自分の延長線上にも「水が何者か分からん」状態があったのだと認識することができた。初読では、地球にやってきて数年の宇宙人が主体なのかなと思ったが、自我の芽生え始めた2歳くらいの自分も、いまの自分にとっては宇宙人くらい未知な存在である。

## ゴールデンウィークについての ゴールデンウィークは ゴールデンウィーク以外／ほのふわり

「ゴールデンウィーク」の擬人化が巧みである。こうすることで「ゴールデンウィーク」が、擬人化された「ゴールデンウィーク」と大型連休としての「ゴールデンウィーク」に分けられた。さん、をつけるとうわかりやすいかもしれない。つまり、「ゴールデンウィーク」さんは「ゴールデンウィーク」中に「ゴールデンウィーク」としての役割を果たしている（働いている）ので、「ゴールデンウィーク」さんにとっての「ゴールデンウィーク」は「ゴールデンウィーク」中以外である、ということだ。言われてみればそうだなあ、という納得の歌。僕が呑気に休んでいるあいだ「ゴールデンウィーク」さんは全国で働いていたのだ。どうしてこんな当たり前のことに気付いてやれなかったんだろう。だからいつも、すぐになくなってしまうのか。今度から労ってやろう。シルバーウィーク、おまえもだよな。

## 四合も炊いて全てをおにぎりに していいですか春は寂しい／いまはじまるの

一合は炊きあがると約300～350グラムなので、「四合」であれば約1200～1400グラムとなる。大きさにもよるが、コンビニの「おにぎり」のお米の部分が約100グラムであることを参考にすると、およそ12個から14個の「おにぎり」ができる（ググリました）。「四合も」と書いてあるから主体としても多いという認識ではあるようだ。それがおそらく「していいですか」という問いかけを生んでいる。誰に、というわけではなく、自身（の常識や良心）への問いかけだろう。こんなにたくさんつくっていいのだろうか、というような。そうしたい理由はおそらく「春は寂しい」から。「春」は出会いと別れの季節である。出会いの外

にいれば「寂しい」し、別れの中にいれば当然「寂しい」。その「寂し」さを癒す、紛らわす手段として「四合」分の「おにぎり」をつくる。ストレスによる爆食というのは僕も経験があるから、その逆（爆にぎり？）のような行為なのだろうか。たくさんの「おにぎり」をつくっているあいだは「春は寂しい」ということを忘れられそうだ。

### 晩冬の螺旋ばかりの試し書き／奎いう子

あの「螺旋」を見たとき、寂しさに似た感情が生まれるのは、誰かがいた痕跡として残されているのに、何も読み取ることができないからだと思う。色もカーブも違う手書きの「螺旋」は何人かがここを訪れたこと、それぞれが違う人物であることを教えてくれるが、それだけである。自分へのメッセージが「試し書き」の紙に書かれているわけがないのに、それがほしくなってしまう。ひとりで森を歩いている。焚き火のあとを見つける。薪はまだあたたかい。そんな寂しさだ。そのイメージに「晩冬の」という言葉がぴったりと沿う。

### 腕相撲にしては焦げ臭くないか／松下誠一

二物衝撃によって思いもよらない光景を見せてくれる句。「腕相撲」と「焦げ臭」さが一文の中に並んでいることは滅多にないと思う。ストーリーをつくるなら、「腕相撲」をしてくると言って隣の部屋に行ったふたりが実は秋刀魚を焼いており、その匂いを主体が嗅いでいる、ふうにもできるだろう。が、これはこの句があるから見ることでできる光景であって、僕ひとりではおそらくたどり着けない。並べたもの同士が近すぎず、遠すぎず、殺し合わず、活かし合い、その結果、見えてくる光景が新しいものであること。松下さんこのような言葉の取り合わせ巧みで、いつも僕を行ったことのない場所に導いてくれる。

### 麦茶の中に顔を沈めて

そっと息を止める／秦大地

やったことがあるかと訊かれたら、ほとんどの人がないと答えるだろう。「麦茶」は飲みもので、飲む以外にはあまり使われないからである（そういうスキンケアなどがあつたらすみません）。お湯や水であれば、洗顔や入浴や水泳などに伴って日常の範囲内と言えそうだが、「麦茶」となると別だ。ではなぜ、このようなことをするのか。それはおそらく「麦茶の中に顔を沈めてそっと息を止める」ことが、日常に対するささやかな破壊行為だからだ。変わらない日常を変えるための小さな抵抗。変わることへの期待と少しの恐怖が「そっと」で表現されているのではないかと思う。「顔」を上げたとき、目に見えるものは変わっていないかもしれないが、心はわずかに、けれど、たしかに変化しているはずだ。

### 君と僕で

頭のアンテナを折る

7月の夜／六月

「アンテナ」は電波を受信、送信するための装置である。「君と僕」が人間であるという前提で話をするが、人間の「頭」にはないはずの「アンテナ」を存在させ、さらにそれを「折る」という行為は、社会や世間、そういった外部との関係を断つことを意味しているように思う。頭のネジが外れる、という言葉があるが、この詩における「頭のアンテナを折る」は、変になる、ということではないだろう。社会性や世間体を気にしすぎて、外部に対して開きすぎている「君と僕」が、本来の人間の姿に戻る、というような意味ではないだろうか。幸い人間はアンテナがなくても自走できるので、そこに残るのは「7月の夜」の熱気と湿気を帯びた身体と心である。一緒に閉じて、もっとふたりきりになる。そういうことを選んだのかもしれない。

以上です。

6月分も楽しみにしております。

木下龍也